

## 『土佐日記』「ふなうた」注釈

橋本智史

一、はじめに

紀貫之によつて書かれた『土佐日記』には六十一首の歌(二)が見られる。このうち三首は和歌ではなく「ふなうた」と記されたものであり、この「ふなうた」は一月九日に二首、一月二十一日に一首出てくる。この三首のうち一月二十一日の「ふなうた」は、

このあひだに、使はれむとて、つきて来る童あり。それがうたふ舟歌、

なほこそ国の方は見やられる わが父母ありとし思へば かへらや  
とうたふぞ、あはれなる。

と書かれているもので、「故郷の方に目が行つてしまふ、父母がそこにいると思う」という歌である。この「ふなうた」は『源氏物語』玉鬘巻の以下の歌と通底するものがある。

舟子どもの荒々しき声にて、「うら悲しくも遠く来にける

かな」とうたふを聞くままに二人さし向かひて泣きけり。

「舟子ども」による、「悲しいことにも遠くに来てしまったものだ」という内容の歌である。故郷から遠く離れた船旅の情緒を歌つたという点で、この歌と一月二十一日の「ふなうた」は共通していると言えよう。『土佐日記』の語り手はこの「ふなうた」を「あはれなる」と評する。しかし、一月九日の「ふなうた」二首はそのような情緒を備えたものとは評価できない。

かくあるを見つつ漕ぎ行くまにまに、山も海もみな暮れ、夜更けて、西東も見えずして、天気のこと、楫取の心にかせつ。男もならはぬは、いとも心細し。まして女は、船底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、船子、楫取は船歌うたひて、何とも思へらず。そのうたふ歌は、春の野にてぞ音をば泣く わかすすきに 手切る切る 摘んだる菜を 親やまぼるらむ 姑や食ふらむ かへらや  
よんべのうなみもがな 錢乞はむ そらごとをして おきのりわざをして 錢も持て来ず おのれだに来ず

これならず多かれども、書かず。これらを人の笑ふを聞き  
て、海は荒るれども、心はすこし風ぎぬ。

ここに載せられた二首の歌の内容は明らかに船旅とは関係がない。この「ふなうた」について、近森敏夫氏は「この三篇は、わが国の「舟唄」とよばれる民謡の、記録された最初のものとしてされている<sup>(10)</sup>。」と述べる。また飯島一彦氏は、

ところで『土佐日記』には「舟子梶取り」の「うたふうた」  
（「ふなうた」）が二首（別に「わらは」が歌う舟歌一首あり）記録されていて有名である。民俗歌謡の記録としては  
最古の部類に属しており、「これならずおほかれども、書  
かず」と記されているのがとても残念なほど、生き生きと  
した歌謡の記録である<sup>(11)</sup>。

と評価する。しかし、『土佐日記』での「ふなうた」の記録が  
このように評価される一方で、当該歌謡そのものの解釈はいま  
だ定説を得ていない。そこで本稿は、『土佐日記』一月九日の  
「ふなうた」二首の解釈に関わる語について検討し、その上で  
「ふなうた」を解釈すること——注釈——を目的とする。この  
注釈には、上代の文献と中古前期の文献を主に手がかりとする。  
それでは、「ふなうた」に注釈を施す前に先行研究について  
簡単に触れておきたい。古注釈はこの「ふなうた」を一首と見  
なしていたが、現代では二首であると考えられている。それは、  
「春の野」から始まる前半部が野を舞台としているのに対して、  
後半部が「銭」「おきのり」という、商売の場を歌っている

いう理由に拠る。この考え方には従うべきであろう。本稿にお  
いても二首であることを前提に注釈を行う。

歌謡の解釈としては、「春の野にてぞ」歌謡について萩谷朴  
氏『土佐日記全注釈』<sup>(12)</sup>が男が泣いている女を見て下心から  
菜を摘んでやったが、「その後はサツパリ梨の礫、骨折り損の  
草臥儲けで、女からは何の反応もない」とする。また、「日本  
古典文学全集」（以下「全集」）が「女が泣くのに同情して男が  
枯れすすきで手を切りながら菜を摘んでやる」、「新日本古典文  
学大系」（以下「新大系」）が「惨めな婿の立場を嘆いた唄か」  
と、男が詠んだ歌とする。一方、「新潮日本古典集成」（以下「集  
成」）が「農家の嫁の苦勞を歌う」とし、「新編日本古典文学全  
集」（以下「新全集」）も同じく「農家の嫁の苦勞をうたう歌。」  
と、女の詠歌とする。また、「よんべのうなぬ」歌謡は騙され  
た商人の歌とすることで諸注一致している。

以下、本稿ではそれぞれの歌謡に語釈と解釈を行い、「ふな  
うた」二首の内容を明らかにしたい。

## 二（一）、「わかすすき」語釈

「春の野にてぞ」歌謡でまず問題となるのは「わかすすき」  
であろう。この言葉は注釈書によって「わかすすき」||「若薄」  
であるか、「わがすすき」||「我が薄」であるか意見が分かれ  
ている。現代の注釈書では、「日本古典文学大系」（以下「大系」）  
「新大系」「新全集」が「若薄」の説、『全注釈』『全集』『集成』  
が「我が薄」の説を取る。

この是非を検討する前に「すすき」について確認したい。『萬

葉集』において「すすき」は以下のように、

我が門に 守る田を見れば 佐保の内の 秋芽子あきはな為な酔すすき  
思ほゆるかも 〔萬葉集〕卷十 秋雑歌 二二二二

と「はぎ」と「すすき」がセットで詠まれる。また、

めづらしき 君が家なる 皮須はだす為な寸す 穂に出づる秋の 過  
ぐらく惜しも 〔萬葉集〕卷八 秋雑歌 一六〇一

のように穂を持つことが明らかである。従って、現代人の考える薄と同一の、穂を持つ植物であると見て良いだろう。

秋の七草に数えられる薄は基本的には秋の歌に詠まれるが、実際は多年草であるため年中生えており、秋にのみ見られるものではない。冬の歌に詠まれた例が以下のように見受けられる。

波太須はたす珠す寸す 尾花逆葺おはなさかき 黒木もち 造れる室は 万世ま  
でに 〔萬葉集〕卷八 冬雑歌 一六三七

また春の例として、『萬葉集』に見られる、竹取の翁に対して娘子等が歌った返歌群九首のうちの一首が挙げられる。

者田はたす為なと寸す 穂にはな出でそと 思ひたる 心は知らゆ  
我も寄りなむ(七) 〔萬葉集〕卷十六 三八〇〇

この歌では「すすき」が「穂」の枕詞として詠まれている。題

詞に「この翁季春の月に、丘に登り遠く望す。」と春であることが提示されていること、同じ返歌群の三八〇二番歌が初句に「春之野乃」と「春」を歌中に持つことを合わせて考えると、三八〇〇番歌は春に「すすき」が詠まれた例と見なせる。

このように、主に秋に詠まれる「すすき」は、冬の歌や春の歌にも稀ながら見られる。多年草という性質と以上の用例から、春正月である旧暦一月九日に歌われた当該歌謡に「すすき」が詠まれることは、珍しいが不自然ではないと考える。

さて、「若すすき」であるか「我がすすき」であるかの問題について、多年草である薄の性質と春という場面から「若すすき」とするのが先に挙げた各注釈書の説である。古注釈においても天保三年刊の香川景樹『土佐日記創見』が、

我薄とつゞけん語勢、有べきならず。又、自他をわけん事、こゝに用なし。然も、春の野につみて、我ならぬを、吾薄といふべけんや。もとより、春ならんには若薄なるべく、言がらも、みやびたるをや。

と、当該歌謡において「我が」、つまり「私が」とわざわざ言う必要がないという点と、「若薄」の方が季節に合い雅語となるため相応しいという点を理由として「若すすき」とする。特に説明を付けないが、文政十二年序の田中大秀『土佐日記解』、天保十三年刊の橋守部『土佐日記舟の直路』も「若すすき」とする。

そこでは「若すすき」説を検討したい。中古前期までの文献では、『大和物語』の和歌に以下の通り「すすき」と「若」

の組み合わせが見られる。

わが宿の　ひとむらすすき　うらわかみ　むすび時には  
まだしかりけり　　〔大和物語〕百二十五段)

「自分の家のすすきは結ぶにはまだ若すぎる」という歌で、この歌の直後には「まことにまだいとちひさきむすめになむありける」という説明がされている。つまりこの「うらわかみ」とされる「すすき」は幼い少女の譬喩であり、「結婚するにはまだ幼い」という主旨の歌であることが分かる。

他に「若」と「すすき」の組合せは管見の限り見つからない。そこで、『萬葉集』中の「若」と植物の複合語に着目したい。見えるものは「若かつら」「若かへるて」「若木の梅」「若草」「若菜」「若櫛くぬぎ」<sup>五</sup>、「若松」である。これらはほとんどが枕詞・序詞・譬喩・象徴など、「若」が何らかの意味を持つている。まずは、譬喩の用例を以下に挙げる。

向つ峰の　若楓わかからの木　下枝取り　花待つい間に　嘆きつ  
るかも　　〔萬葉集〕卷七 譬喩歌 一三五九)

これは、「向こうの山にある若いかつらの木の花が咲くことを待っている間に嘆いている」という主旨の歌である。この「若かつら」は「譬喩歌」という部立からして若い女性の暗喩であることが明らかであろう。また、同じく譬喩として「若木の梅」が以下の通り見られる。

春雨を　待つとにしあらし　我がやどの　若木乃梅わかきのうめもい  
まだ含めり　　〔萬葉集〕卷四 相聞 七九二)

「我が家の若木の梅もまだ花が咲いておらず、春を待っているのであろう」という歌であるが、これは藤原久須麻呂が大伴家持の、

春の雨は　いやしき降るに　梅花うめのはな　いまだ咲かなくい  
と若美わかみかも　　〔萬葉集〕卷四 相聞 七八六)

に答えたものと目され、この七八六番歌の「梅の花」は家持の娘の譬喩であるので、七九二番歌の「若木の梅」も若い女性の譬喩と解されることとなる。

次に、「若」が象徴の意味を持つ例を挙げる。

子持山　和可加わかか飯流豆いわた　もみつまで　寝もと我は思ふ  
汝はあどか思ふ　　〔萬葉集〕卷十四 相聞 三四九四)  
敵ろの　沿わかひの和可麻都わかま　限りとや　君が来まさぬ　うら  
もとなくも　　〔萬葉集〕卷十四 相聞 三四九五)

前者の「若かへるて」は「もみつまで」と結びついて「若いときから老いるまで共に寝たい」という意味を示す。また後者の「若松」は「全集」が「松は永遠の木とみなされ、次のカギリと対照させている」と説く通りであろう。「新大系」が「限り」の序詞と見なしていることも首肯され、下の句の「あなたがいらつしやらないことが不満である」というのが歌の本旨である。

次に、序詞を構成する「若菜」「若櫃」の歌を以下に挙げる。

川上に 洗ふ若菜わかば 流れ来て 妹があたりの 瀬にこ  
そ寄らぬ 〔萬葉集〕 卷十一 譬喻 二八三八

この歌は左注で「草に寄せて思ひを喻へたるなり」と書かれており、寄物陳思型の和歌であることが明らかである。流れてくる若菜を見て、「若菜が流れていくように愛しい人のところへ行きたい」という思いを述べた歌である。「若櫃」についても、

度会の 大川の辺の 若歴木わかかみぎ 我が久ならば 妹恋ひむか  
も 〔萬葉集〕 卷十二 羈旅発思 三二二七

の上の句が「我が」の序詞であり、「久しく会わなくなれば、恋人は自分を恋しく思うだろう」という、下の句の部分が本旨の歌であることは動かないであろう。

また、「若草の」は「つま」の枕詞として多数見られる。唯一「若」と植物の複合語が、譬喻や序詞などになっていない例が以下の歌である。

去年の春 い掘じて植ゑし 我がやどの 若樹梅わかきのみめは 花咲  
きにけり 〔萬葉集〕 卷八 春雑歌 一四二三

「昨年しんねんの春に土を掘って植えた梅の花が咲いた」という主旨の歌であるが、この歌に見られる「若木の梅」は、梅が鑑賞される植物であること、歌中での梅の木が去年植えられたものであ

ることからこのように歌われていると考えられる。

さらに「若」と植物の複合語は、「大系」所収「神楽歌」七六番歌に「若桜」という例で見られるが、桜が鑑賞されるものであること、鑑賞できる期間が限られていることを考えれば「咲いたばかりの桜」という意味で使われていると考えられる。

以上の例から、歌における「若」と植物の複合語は、何らかの枕詞・序詞・譬喻・象徴となっているか、或いは歌中の季節に応じて観賞される植物については、「若」が付くに相応しい年数ないしは時期が見出せることが分かる。ここで当該歌謡に目を向けると、当該歌謡の「すすき」は人の手を切るだけの存在であり、何らかの枕詞・序詞・譬喻・象徴となっていない。確かに「春」という季節から「若すすき」を考えそうになる

が、生え立ての柔らかい薄で人の手を切ることができるかは疑わしい。また、旧暦の正月の時事には枯薄が見られる。枯薄でも葉緑素が抜けて、赤紫色になった枯れかけの薄は硬さを保っており、通常の薄はと同じく皮膚を切ることができる。

従って、当該歌謡の「すすき」が枕詞・序詞・譬喻・象徴のいずれとしても機能していない点、皮膚を切ることの出来る枯れかけの薄が当該歌謡の歌われた旧暦正月にも見られるという点、以上の二点から「若すすき」説は妥当ではないと考える。「すすき」は枯れかけの薄のことであろう。

次に「我がすすき」説を検討したい。「我が」は所有を表す「我が」ではなく、「手切る切る摘んだる菜を」の「手切る切る摘んだる」の主語である。主語を示す「我が」と動詞の間に語が入る例は以下のように見られる。

人こそば 凡にも言はめ わがこころ 我幾許 しのふ川原を 標結

ふなゆめ 〔萬葉集〕 卷七 問答 一二五二

ゆくすゑの 宿世も知らず わがむかし 契りしことは

おもほゆや君 〔大和物語〕 百二十四段

従つて、当該歌謡においても主語「我が」と「手切る切る摘んだる」の間に「すすき」の語が入っていることに問題はない。以上の考察から、「わかすすき」は「我がすすき」と解したい。

## 二(二)、「まぼる」語釈

次に「親やまぼるらむ」句の「まぼる」について検討したい。「まぼる」は諸注で「食べる」の意であるとされている。『うつほ物語』藤原の君巻にのみ見られる「かくて、臥したまへるほどに、まうぼるもの、日に橋一つ、湯水まうぼらず、」の「まうぼる」が縮まった形という考えである。この「まうぼる」は、節制した生活によって財産を蓄える三春高基が病床にあるときに用いられており、「召し上がる」の意味である。

当該歌謡の「まぼる」が「食べる」の意味であることは、古代歌謡の対句の特徴から指摘ができる。当該歌謡の「親やまぼるらむ」が後の「姑や食ふらむ」と対句を成していることは明らかである。古代歌謡の対句は、以下のものが例として挙げられる。

枕かむとは 吾はすれど さ寝むとは 吾は思へど

(景行記)

これは「あなたの腕を」枕にしようとは私はするが、あなたと寝ようと私は思うが」と女性との共寝を望む気持ちを表している。また、古代歌謡の対句の例として以下のものも挙げられる。

万代に かくしもがも 千代にも かくしもがも 畏みて  
仕へ奉らむ 押みて 仕へ奉らむ 歌づきまつる

(推古紀)二十年春正月

この歌謡は「万代もこのように、千代もこのように」(いらっしやつて欲しい)。(我々は天皇に) 畏みお仕えしよう、押みお仕えしようと永久に続く天皇の繁栄への願いと、その天皇に仕える意志を表している。古代歌謡の対句はこれらのように、ほぼ同じ意図を持つものが多い。従つて、当該歌謡の「まぼる」が「食ふ」と似た意味の語句であることは間違いないと考える。語形と意味が似ていることから、『うつほ物語』の「まうぼる」と当該歌謡の「まぼる」が関連しているとする先行研究の指摘は首肯できよう。

ただし、『うつほ物語』の「まうぼる」の例は、大臣となつた三春高基に用いられている。前後の三春高基の動作について尊敬語が用いられていることから、この「まうぼる」は「召し上がる」という尊敬語であることが明らかである。それでは当該歌謡の「まぼる」は尊敬語であるかと問われると、そうではないと思われる。「まぼる」の主語である「親」という語について『萬葉集』を見ると、「親」が出てくる歌はいくつか見られるが、動作に尊敬語が使われていないものがある。以下がそ

の例である。

みさご居る 磯廻いそまわに生ふる なのりその 名は告らしてよ  
**親者知友**  
上野 佐野の船橋 取り放し 於おの也波左久礼なみよひさのり 我は離るがへ  
『萬葉集』卷三 雑歌 三六二  
『萬葉集』卷十四 相聞 三四二〇

前者は「あなたの親が知つたとしても名を教えてくれ」という求婚の歌であり、後者は「あなたの親が離そうとしても離れない」という意志を歌つたものである。「親」に尊敬語が使われる例もあるが、この例のように使われない場合もある。『土佐日記』一月二十一日の「ふなうた」でも「わが父母あり」と思へば」と「父母」に尊敬語が使われていない。また、「親」だけではなく一般的に敬語が使われる「神」についても、以下のように使われない例が見られる。

**海神** 持在白玉 見まく欲り 千度そ告りし 潜ひそきする  
海人は 『萬葉集』卷七 譬喩歌 一三〇二

この歌では「海神の持つている白玉」と「海神」の動作に尊敬語を示す表記がなく、音数から考えても尊敬の意味の語を補うことは出来そうにない。以下の例も同じく「神」に尊敬語が使われていない。

……大船おほいぶねの頼める時に ちはやぶる **神哉將離** うつせ  
みの **人歎禁良武**…… 『萬葉集』卷四 相聞 六一九

「神」と「人」とが対句になっており、「神」に尊敬語を示す表記が見られない。これらの例から、「姑や食ふらむ」と対句をなす「親やまぼるらむ」の「まぼる」は「食ふ」と同じ、尊敬語ではないと考える<sup>1)</sup>。

さて、この「まぼる」を文化十二年序の岸本由豆流『土佐日記考証』が「まぼるは、むさぼるの、つゞまりたるにて、貪らんなり。」と記した影響か、現代の注釈書でも「全集」「新全集」「新大系」は「むさぼる」と訳出している。しかし、『うつほ物語』の「まうぼる」にその意味は見いだせない。「食べる」という訳出が穏当であろう<sup>2)</sup>。

### 二(三)、「らむ」語釈

続いて、対句となっている「親やまぼるらむ 姑や食ふらむ」の「らむ」について検討したい。「らむ」は一般に現在推量の助動詞と言われるもので、眼前にない事柄を推量する際に用いられる。たとえば、以下の山上憶良の歌が有名であろう。

憶良らは 今は罷らむ 子將哭なぐらむ それその母も 我を將待まつらむ  
そ 『萬葉集』卷三 雑歌 三三七

音数から「將」は「らむ」と認められる。この歌で憶良は「今頃は子と妻が私を待って泣いているだろう」と推量し、宴から退出する意志を歌っている。これと同じように「今頃自分の家では親が食べているのだろうか」と推量して、それで泣いてい

る歌であるとするのが「集成」「新大系」「新全集」の説である。しかし、これら注釈書の解釈では当該歌謡は嘆きの歌となり、「人の笑ふ」という状況を生み出したとは思えない。

ここで「らむ」の例を検討すると、この助動詞には、直面している事態を受けて、そこから眼前にない事態を推量するという用法があることが分かる。たとえば、以下の歌が挙げられる。

梅の花 散らす春雨 いたく降る 旅にや君が 廬入西留  
良武 (『萬葉集』卷十 春相聞 一九一八)

この歌は、「雨がひどく降っている」という眼前の事態を受けて、「旅に出ているあなたは今、この雨の中で宿りをしているのだろうか」という眼前にない事態を推量しているものである。次の歌についても同じことが言えよう。

旅にあれど 夜は火灯し 居る我を 闇にや妹が 恋ひつ  
つ安流良牟 (『萬葉集』卷十五 三六六九)

この歌は、「旅の夜に火を灯している自分」という事態に寄せて、「家にいるあなたは、灯りのない闇の中で私を恋しく思っているのだろうか」という事態を推量しているのである。

そして、「らむ」を用いて直面している事態を受けてある事態を推量するときに、その推量された事態の内容が「直面している事態の原因・理由」となっていることがある。たとえば、以下の例が挙げられる。

なぞ鹿の わび鳴きすなる けだしくも 秋野の萩也や 繁  
くを將落 (『萬葉集』卷十 秋雑歌 二一五四)  
秋のよの 明くるもしらず なく虫は わがこどものや  
かなしかるらむ (『古今集』卷四 秋歌上 一九七)  
夢路にも 露やおくらむ 夜もすがら 通へる袖の ひち  
てかわかぬ (『古今集』卷十二 恋歌 二五七四)

一首目は原文の「也」との対応ならびに、七音句になるべきところから、「將」を「らむ」と訓むことに問題はないだろう。この歌は鹿が鳴いているという事態について、その原因を「萩がしきりに散っているからだろうか」と推量しているものである。二首目も「虫がないている」という事態について、「悲しいからであろうか」とその原因を推量し、三首目も同じく「袖が乾かない」という事態について「夢路に露があるからであろうか」と原因を推量している。

これら「らむ」の用法を踏まえると、当該歌謡の「らむ」は「春の野にてぞ音をば泣く」という事態があり、それを受けて「親やまばるらむ 姑や食ふらむ」という推量をしているものと考えられる。そして、この「泣く」という事態に対する「親が食べているのだろうか、姑が食っているのだろうか」という詠は、「泣く」という事態の原因を推量しているものと認められよう。

ところで、塚原鉄雄氏が「らむ」によって推量されている事態を「ただし、それが事実であるかについては、何らの根拠も、証拠も、示されていない。」<sup>(5)</sup>と説く通り、その内容が事実であるかは分からない。さらに当該歌謡は疑問の係助詞「や」が



つくことで、事実であるかどうかは一層不確かとなつてゐる。その点から、「我が」は一人称ではないと思われる。自分が「泣く」という事態を受けて「自分が薄で手を切つて摘んだ菜を、自分の親が食べているのであるうか、自分の姑が食つているのであるうか」と自分で推量することは考えがたいからである。泣いている人物と、推量を行つてゐる人物は別人であるう。

### 三、「春の野にてぞ」歌謡解釈

これまで「春の野にてぞ」歌謡の語釈を行なつてきた。内容について把握できたのは、「春の野にてぞ音をば泣く」という事態に対して「我が薄に 手切る切る摘んだる菜を 親やまぼるらむ 姑や食ふらむ」という原因の推量を行なつてゐるといふことである。このときの「我が」を一人称と取ることが出来ないことは二(三)で述べた通りである。

それでは、この「我が」はどのような用法の語なのだろうか。結論から述べると、この「我が」は他者からの、いま話題の対象となつてゐる人物を指す用法、いわゆる反射指示であると考へられる。一人称代名詞の反射指示は「おの」が上代から見られ、「我が」の反射指示用法は中古からわざわざながら見られるようになる。以下がその用例である。

旅の御姿ながら、**わが御家**へも寄りたまはずしておはしまし  
したり。 (『竹取物語』)

宇津の山にいたりて、**わが入らむ**とする道はいと暗う細き  
に、蕨かへでは茂り、もの心細く、すずるなるめを見るこ

と思ふに、修行者あひたり。 (『伊勢物語』九段)  
泣く泣くうちふして、かたはらを見れば文なむ見えける。  
なぞの文ぞと、思ひてとりて見れば、この**わが思ふ人**の文  
なり。 (『大和物語』百五段)

『竹取物語』の例は主語ではなく所有を表す「我が」であるが、これが最もはつきりとした反射指示の用例である。翁がかぐや姫にくらもちの皇子の来訪を告げる際に「ご自分の家にもお寄りにならずに」と第三者であるくらもちの皇子のことを指している。『伊勢物語』『大和物語』の主語の例は、『伊勢物語』が「自分が入らうとしてゐる道はたいそう暗く細くて」、『大和物語』が「この、自分が思つてゐる人の手紙である」という意味で、それぞれ反射指示の一例と見受けられる。当該歌謡の「我が」が一人称でないならば、このように話題になつてゐる人物を指して「自分が」という意味であると見るべきであろう。

それでは、当該歌謡は一貫した第三者による詠なのかと言へばそうとは考えられない。「春の野にてぞ音をば泣く」は主語が全く提示されていない点から考へて、第三者が「泣いてゐる人物がいる」と描写をしてゐるのではなく、泣いてゐる本人が悲しみの心情を吐露してゐるものと取るべきであろう。つまり、「春の野にてぞ音をば泣く」と悲しみを歌う者と、「我が薄に手切る切る摘んだる菜を 親やまぼるらむ 姑や食ふらむ」とその事態の原因を推量して歌う者がそれぞれ存在しているといふことである。これまでの『土佐日記』の注釈書は当該歌謡一首を、ある一人の人物からの視点による詠と見なしていた。しかし、そのような見方が歌謡の解釈に必須というわけではない。

二者による歌は『記』『紀』に以下のように見られる。

是の夜に歌を以ちて侍者に問ひて曰はく、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

とのたまふ。諸の侍者、え答へ言さず。時に秉燭者有り。

王の歌の末を續ぎて歌して曰さく、

かがなべて 夜には九夜 日には十日を

とまをす。 (「景行紀」四十年)

是に、志毘臣が歌ひて曰はく、

大宮の 彼つ端手 隅傾けり

如此歌ひて、其の歌の末を乞ひし時に、袁祁命の歌ひて曰はく、

大匠 劣みこそ 隅傾けれ (「清寧記」)

前者の例では日本武尊が歌の続きを他者に求め、それに秉燭者が応じている。また、後者の例でも志毘臣が歌の続きを求め、袁祁命が応じている。これらの歌謡は一首ないし一聯のものとして理解され、実際の集団詠の場においては集団が二手に分かれて歌ったのであろう。

当該歌謡も同じく、集団が二手に分かれて歌ったのだと考えられる。一方の詠に対してもう一方がその事態の原因を推量して返歌を詠む例は、『萬葉集』にも以下のように見られる。

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

我が里に 大雪降り 大原の 古りにし里に 降らまく

は後

藤原夫人の和へ奉る歌一首

我が岡の 霏ほかに言ひて 降らしめし 雪の摧けし そこに塵家武 (『萬葉集』卷二 相聞 一〇三・一〇四)

門立てて 戸もさしたるを いづくゆか 妹が入り来て 夢に見えつる

門立てて 戸はさしたれど 盗人の 掘れる穴より 入りて所見牟 (『萬葉集』卷十二 問答 三二・三二七・三二八)

これらは個人による贈答歌であり、それぞれが独立した一首であるが、前者は「大雪が降った」と歌う天武天皇に対して、藤原夫人が「こちらの霏(龍神)に頼んで降らせた雪がそちらにも散ったからでしょう」と天皇のところで大雪が降ったという事態の理由を推量しているものである。また後者は、「門を閉めて戸を立てたのにあなたはどうかやって私の夢に見えたのだから」と歌う男に対して、「盗人が掘った穴から入ってあなたの夢に見えたからでしょう」と夢に見えたという事態の理由を推量している。この例と同じく、「春の野にてぞ 音をば泣く」の原因を推量した返しが「我がすすき」以降の「自分がすすきで手を切つて摘んだ菜を親が食べているからか、姑が食つていからか」という詠であると考える。

以上の考察から、当該歌謡は二者の視点による一首であり、後者の詠が前者の詠の原因を推量しているものであると考えられる。それに従って当該歌謡に現代語訳を付すと以下のようになる(ただし、囃子詞と目される「かへらや」については訳出しない)。

「春の野で声をあげて泣いているよ」

「自分が薄で手を切って切ってまでして摘んだ菜を、親が食べているからか、それとも姑が食っているからか」

声をあげて泣いているという、深刻な事態が発生しているように思える詠に対して、「親が食べているからか、それとも姑が食っているからか」と返すのはあまりに無根拠かつ唐突である。ここに当該歌謡の滑稽さがあり、その滑稽さが「人の笑ふ」という状況を生み出すのであろう。

#### 四、「よんべのうなぬ」歌謡注釈

それでは、「よんべのうなぬ」歌謡の注釈に移りたい。当該歌謡は解釈において「春の野にてぞ」歌謡ほど問題を持たないが、数点確認しておきたい事がある。

「うなぬ」については諸注の言うとおり「子供」で良いと思われる。『新撰字鏡』「髻」字に「大欠反上髪至肩垂貞宇奈井」、二十卷本『和名類聚抄』「髻髪」の項に「後漢書注云 髻髮 召反和名宇奈為 俗用垂髮二字 謂之童子垂髮也」が確認できる。「童子」の髪型を指すことから転じて「童子」そのものを指すことが以下の例から確認できる。

また十五歳ばかりにて、玉光り輝くうなぬの、御馬添多くて渡りたまふ。うなぬはこの大臣殿の御四郎にあたりたまふ。  
（『うつほ物語』俊蔭巻）

橘の 照れる長屋に 我が率寝し 宇奈為放りに 髪上げ  
つらむか  
（『萬葉集』巻十六 三八二二）

『うつほ物語』の例では十五歳の少年に対して使われ、『萬葉集』の例では「うなぬ」に「寝」が使われて性的対象となっていることから、子供とはいってもある程度の年齢の人物を指すことが分かる。この語は男女関係なく用いられるが、当該歌謡においては「船子、楫取」がいきなり「うなぬもがな」、つまり「会いたい」と歌い始めるのだから、聞き手は「少女」を想像してしまうだろう。現代の注釈書も多くが「少女」と訳出している。ただし、唯一「新全集」が「子供にだまされた商人の歌」と「うなぬ」の性別を特定していない点、注目すべきである。少なくとも歌からは「うなぬ」の性別は特定できないため、「新全集」の訳に賛同したい。

「おきのり」もまた諸注説く通り「掛買いをする」の意に従える。天治本『新撰字鏡』で「賒」の字に「於支乃利也」と見える。さて、この語の意については問題がないが、現代の『土佐日記』の注釈書は、管見の限り全てこの語を「おきのり」と校訂する。この点には従いがたい。観智院本『類聚名義抄』では「賒」「貰」「酷」字に「オキノル」、「貸」字に「ヲキノル」の訓が見られ、「オキノル」の「キ」に付く声点はいずれも左上に一点のみ、「ヲキノル」の「キ」には声点が付いておらず、どれも濁音とは認められない。また、『日葡辞書』でも「Voginori uota」と書かれており、十七世紀初頭までは清音であったことが分かる。「日本国語大辞典 第二版」も「後世「おきのり」とも」としながら「おきのり」で載せる。十世紀の土

佐方言では「おぎのり」だったという可能性がないわけではないが、清音で「おきのり」と校訂しておく方が妥当であろう。

当該歌謡に現代語訳を行えば以下のとおりになる。

昨夜のあの子に会いたいなあ。代金を請求しよう。嘘をついて掛買いをして、代金を持ってこない。自分がやつて来ることすらない。

この歌謡の持つ「人の笑ふ」という状況を生み出した性質は、「うなぬ」の性別を除けば『全注釈』の「人をだますことを天職としているような商人が、まんまと少女にだまされたという痛烈な滑稽さ」という指摘に従えよう。

## 五、おわりに

以上、『土佐日記』の「ふなうた」二首の注釈を行った。「春の野にてぞ」歌謡は、返しを持つものであり、「春の野で泣いている」と歌う側に対して「苦勞して摘んだ菜を親が食っているからか、姑が食べているからか」という滑稽な返しをするものである。また、もう一首の「よんべのうなぬ」歌謡は、商人が子供に騙された歌と考える。

さて、ここで新たに問題となってくるのは、なぜこの二首が『土佐日記』に記載されたのかということである。『土佐日記』は二首の後に「これならず多かれども、書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心はすこし風ぎぬ。」と記す。ここから分かることは、「歌謡は多く歌われたが、他には書か

ない」ということと、「それらの多くの歌謡が、人を笑わせた」ということである。記載されていない歌謡もまた、当該二首と同じく人々を笑わせたということになる。人々を笑わせた点において当該二首も記載されていない歌謡も差はない。

漢詩や甲斐歌（風俗歌か）の歌詞を載せない『土佐日記』に、和歌でない歌である「ふなうた」が三首も記載されていることは、やはり目を引く。一月二十一日の「ふなうた」は、船旅での叙情性を持つことから、船路を行く紀行文としての側面を持つ『土佐日記』に記載されたと理解できよう。しかし、本稿で注釈を施した「ふなうた」二首の内容は船旅に即したものである。十二月二十七日の甲斐歌が「また、ある人、西国なれど甲斐歌などいふ」と、「土佐国という西国に在るのに、東国である甲斐国の名が付いた甲斐歌を歌う」として『土佐日記』に頻繁に見られる諧謔表現のために記されたのであるなら、「ふなうた」も同じく歌を載せずに「これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心はすこし風ぎぬ。」という諧謔表現のみで良かったはずである。また、歌の内容の滑稽さに関心を持って載せるのであればこの二首のみでなくとも良かったであろう。おそらく、この「ふなうた」二首に、『古今集』编者紀貫之は記載したくなるだけの要素を見出したのではないだろうか。その要素は何かと問われると、和歌世界の価値観を裏切る歌の展開であったのではないかと考える。

「春の野にてぞ」歌謡の「春の野」や「音を（ば）泣く」という言葉は、和歌の世界においては恋歌を思わせる。たとえば、「春の野」の恋歌としては以下の例が挙げられる。

戯奴がため 我が手もすまに **春野**に 抜ける茅花そ 召

して肥えませ 〔萬葉集〕卷八 春相聞 一四六〇

きみがため **春の野**にいでて わかなつむ わが衣手に

雪は降りつゝ 〔古今集〕卷一 春歌上 二二一

どちらの例も「春の野であなた（「わけ」は卑下した二人称であるので、この訳出はやや不適切ではあるが）のために菜を摘む」ということを歌っている。また、「音を泣く」という表現は以下の例のように使われる。

劍太刀 身に添ふ妹を とりみがね **哭乎會奈伎都流** 手

兒にあらなくに 〔萬葉集〕卷十四 相聞 三四人五

秋の野を わくらむ鹿も わがごとや しげきはりに

**音をばなくらむ** 〔大和物語〕五十三段

それぞれ「長い間寄り添った恋人を引き留められずに声を上げて泣いている」「鹿も私のように障害があつて愛しい相手に会えずに泣いているのだらうか」というように、「音を泣く」は会えない悲しみについて用いられる。他にも『古今集』には、

**春の野**の しげき草ばの 妻恋ひに とびたつ雉子の **ほ**

**ろゝとぞなく** 〔古今集〕卷十九 誹諧歌 一〇三三

と、「春の野で妻恋しさに泣いている」との主旨の歌がある。

貫之がこの歌謡を初めて聞いたとき、「春の野にてぞ 音をば泣く」から、何らかの恋歌的な展開を予想したことであろう。

しかしその予想を裏切り、歌謡は滑稽な返しへと展開していった。「よんべのうなゐ」歌謡も同じく、「昨夜のあの子に会いたいなあ」と、この初句のみを聞けば、一夜の共寝をした相手にもう一度会いたいという気持ちで歌うものであるかのように思える。特に、「船子、楫取」という男たちが歌えば、「うなゐ」は少女であるとまず想像してしまうだろう。しかし、この歌謡もそれを裏切り、「銭乞はむ」と滑稽な内容を展開していく。このような、貫之の抱いた予想を裏切る展開を見せた両歌謡が、多く歌われた「ふなうた」の中でも特に印象深かったために、『土佐日記』への記載に至ったのではあるまいか。

本稿ではひとまず上代文献と中古前期の文献を主に用いて「ふなうた」二首の注釈を行い、従来必ずしも十分には把握されて来なかった歌謡の内容を明らかにした。『土佐日記』にのつての「ふなうた」が一体何であつたのかを、当代の歌物語や作り物語などとの比較を通してさらに明らかにすることを今後の課題として本稿を終えたい。

[注]

- (一) 「新日本古典文学大系」(岩波書店)の歌番号に依る。これは「ふなうた」を含む歌番号である。
- (二) 近森敏夫『土佐の民謡』(中公新書 昭和四十六年三月)
- (三) 飯島一彦『古代歌謡の終焉と変容』(おうふう 平成十九年三月)
- (四) 萩谷朴『土佐日記全注釈』(角川書店 昭和四十二年八月)。以下、『全注釈』と略す。
- (五) 現在は「若久木」とする説が一般的であるが、原文「若屋木」

から「若櫃」と解する。

(六)『本草綱目』は「芒」について「葉皆如茅而大、長四五尺、甚快利、傷人如鋒刃」と説明する。

(七)傍証として現代の方言を確認しておく、加藤正信氏「全国方言の敬語概観」(林四郎・南不二男編『敬語講座 六 現代の敬語』(明治書院 昭和四十八年十月)所収)の調査によれば、現代の高知方言には東日本の大部分と同じく尊敬表現が見られない。当時の土佐方言でも全く同じであったかは分からないが、当時の土佐が現代と同じく無敬語地帯であったと仮定すると、中央での尊敬語「まうぼる」は土佐に「まぼる」という縮まった形で伝わったが、「まぼる」は敬意のない「食、べる」の意味で使われたのだと推測される。

(八)この「まぼる」「まうぼる」の語について興味深い見解を示しているのが田中大秀『土佐日記解』である。田中大秀は、

又、按に、「皇極紀」に、「二年十一月云々、山背大兄王等。

四五日間淹留於山。不得喫飲」とある此「仮字、ホの上のノ字は衍にて、是も、マウホラスなるべし。

と「皇極紀二年十一月」の「不得喫飲」の訓をその意味から「まうぼらず」に改めるべきだと主張している。現代の『紀』の注釈書は「大系」が「まうのぼらず」、「新全集」が「まゐのぼらず」

とするが、いずれも謙讓語で「参上する」の意味であるから表記の意にそぐわない。「召し上がる」の意味を持つ「まうぼる」に改めるべきという田中大秀の説を支持したい。そして、もしこの「皇極紀」の例が数に入れられるのなら、やはり当該歌謡の「まぼる」には「食る」の意は見出し難いと言わざるをえないだろう。

(九)塚原鉄雄「推量の助動詞」『国語国文』二十六卷七号(昭和三十三年七月)

#### 〔附記〕

本稿では本文の引用に以下のものを使用した。

『土佐日記』『萬葉集』『古事記』『日本書紀』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『うつほ物語』『源氏物語』……『新編日本古典文学全集』(小学館)

『古今和歌集』……『新日本古典文学大系』(岩波書店)

『土佐日記考証』『土佐日記創見』『土佐日記解』『土佐日記舟の直路』……『土佐日記古注釈大成』(誠進社 昭和五十四年六月)

なお、引用に際して一部表記を改めた点がある。

(はしもと さとし・本学大学院文学研究科修士課程)